第3回 PROJECT プロジェクト 100年

京都をよみがえらせた琵琶湖疎水

都を東京へ遷す代償として下賜された恩賜金。これを京都の将来のためにいかした人々の先見性が町をよみがえらせ、美しい風景を残した。

田村明

古都に馴染んだ新しい景観

私が初めて京都を訪れたのは、敗戦からまだ三年もたっていない昭和二十三年の春のことだった。あの大戦でも何とか生き残り、戦後の食料難で栄養失調で倒れることもなく、戦災のなかったこの平和な京都を訪れたことの感慨は、言葉ではとても言いつくせない。

桂離宮や修学院もすばらしかったが、京都らしいのは東山の麓である。南禅寺から永観堂を銀閣へ上る散策の道は、落着いた古都の香りがただよっている。その南禅寺の境内で異様なものにぶつかった。ローマの水道橋を小さくしたような、煉瓦造の連続アーチである。この西洋風の構造物は、南禅寺の建築物とは似ても似つかぬ異質のものである。それでいて奇妙にこの境内に調和していた。それが、琵琶湖疎水を見た初めであった。

北へ上ってゆく北白川の散策の道は、哲学の小道とよばれる。これも琵琶湖疎水の分水路で、あの南禅寺の赤煉瓦のアーチに続いている。いまも、最も京都らしい無くてはならぬ風景になっているこの道も、千二百年の古都からみれば、百年そこそこという歴史の浅い、初めは異質のものであったろう。

京都といえば古都というイメージは、当然誰もがもっている。しかし、その風景は時代とともに新しいものを加え、当時の最も先端的で異様とも思われるものも造ってきた。しかも、疎水はいまでも機能としても生きているし、風景としては無くてはならぬほど、しっくりと馴染んでいる。

赤煉瓦の構造物といえば、東京では銀座の煉瓦街が有名である。明治五年の火事を契機としてウォートルースの設計になった洋風建築街は明治七年にあらかた完成、全部の完成は明治十一年である。しかし、現在の銀座には煉瓦街の面影をとどめるものは何ひとつない。ところが、銀座の完成後わずか三年後に構想され、明治二十三年に完成した琵琶湖疎水はいまも立派に生きているし、古都の景観を形づくっている。あの北白川の哲学の小道の存在しない姿など、いまは考えられない。

一切外国人に相談すまいと……

琵琶湖疎水は、明治十四（一八八一）年二月、京都府知事として着任した北垣国道の主唱により始められた。事実上の遷都がおこなわれてからすでに十二年、京都は沈滞していた。計画はこの都市の衰退を挽回し、興隆をはかろうというものである。琵琶湖の水をトンネルで抜き、京都市内に引き入れる。目的は、まず産業の振興であった。工業の機械を動かし船運の便をはかり、田畑を灌漑する。それに加えて都市の公益のための、火災の際の水利、上水用にあてることであった。

北垣国道

北垣知事はこの疎水工事を外国人に頼らず日本人の手でおこなおうとした。「斯かる大工事を日本人の技術のみで能く造りうるか否かというについて、余は大いに苦心した。何故かというと、余はその以前開拓使に居った。この時の経験で、外国人を相手にすれば莫大な金が要ってとてもやりきれぬということを知っていたから、是非日本人の手でやらねばならぬ。一切外国人に相談すまいと堅く決心した」と語っているが、当時としては一大決心である。

何しろ、総額百二十五万円余を要した大工事である。京都府の歳出予算は、明治十八年で五十三万五千円にすぎない。その倍以上の額を投ずるのだから、まさに巨大プロジェクトであった。

当時はまだ、お偉い外人が幅をきかせていた。まだ、重要なことについては外人でなければという時代に、北垣知事の意見は卓見であり、勇気を要する決断であった。これも、首都ではない京都だからできたことかもしれない。

十九歳の学生に計画を託す

それにしても、日本人のすぐれた技術者がいるかどうかが問題で、工部大学（現在の東京大学工学部）の大鳥圭介に照会したところまだ工部大学の学生であった田辺朔郎を「是ならば、必ずこの大工事をなしとげるに相違ない」と推薦した。

田辺は、まだ弱冠十九歳。北垣知事の着任後二ヵ月という早い時期の明治十四年四月、京都に旅行して知事にも会い、琵琶湖を踏査し、実測の準備をしている。この時にはまだ東海道線も開通していない。

まだ学生の田辺が策定した案で具体的な協議に入り、京都着任の一年後には、二十二才で知事に同行し太政官会議、つまり、今日の閣議でこの案の説明をおこなっている。明治十八年一月には起工の許可を得、この年八月に着工した。大津三保崎から三井寺山下、山科を経て京都三条蹴上に至る本線は約十一・三キロメートル、北白川の哲学の小道へ抜ける支線は約八キロである。

田辺は、この工事をできるだけ短期間で完成させることを考えた。そこで、各工事区間を同時併行的に、時期を同じく完成するように着手した。とくに最も困難である長等山隧道は、東西の両口より掘り出すだけでは足らないとみて、中央部に縦穴のシャフトを掘り中央部からもトンネルを掘ることにした。このため、当初六年はかかるという工事をわずか四年八ヵ月で、明治二十三年三月に完成させてしまった。

田辺が果たした役割は、それだけではない。完成も間近になった明治二十一年になって、米国のアスペンで水力発電をおこなっていると聞き、急拠米国へ出張する。米国の中心である東部でさえ、まだ一般には水力発電の何たるかを知らない状態であった。このアスペンの水力発電はわずか百五十馬力で、別に八百馬力のものを建設中であった。田辺は、帰国後早速、疎水を利用して米国のものを上まわる大規模な二千馬力の発電を計画し、追加工事として着手した。これは、わが国の水力発電の最初のものとなる。外国の技術を上まわるものを完成させたのである。

疎水建設の資金はどこから？

琵琶湖疎水は、このように青年技術者田辺の活躍が鮮やかに浮び上がっており、日本の土木史上の大成功物語として語られる。それはそれですばらしいことだが、その背景になった資金の問題は見おとされがちである。

明治元年九月、天皇は京都を発して江戸に向かい、十月江戸を東京と改め、首都を西京（京都）と東京の二京制にした。天皇は同年十二月いったん京都へ帰り、京都市民を安心させたが、翌明治二年二月二十四日、太政官が東京に移転してしまった。三月には天皇も再び東京へ向かい、東京城を正式の皇居とする。このときから宮城とよばれるようになり、事実上の遷都がおこなわれた。しかし、明治政府は遷都とはいわずに、奠都といった。奠都とは、ある土地に都を定めることである。東京に都を定めたからといって、京都から都を移したことにはならないという理屈であった。東西二京制なら、明治三年には天皇は京都へ帰らなければならない。ところが三月十八日に、諸国図作を理由に京都行きの延期が布告され、この後、遂に天皇は京都へ帰ることなく、二京制は事実上廃止された。

実はこの明治三年に、京都市民をなだめるため、恩賜金十万円を産業基金として京都に下賜された。明治十三年までは京都府がこの基金を管理し、明治十四年からは京都市の前身に当たる上下京区役所に移管し、上下京区連合会がこれを管理していた。この運用利殖金は、明治二十二年までに二十九万六千九百七十円にのぼり、元金と合わせて三十九万円余になる。北垣知事のころは、そこまでにはならないが、約三十万円とみて、総工事概算六十万円の半分にこの恩賜金をあてようと考えたのである。

田辺朔郎

遷都の代償をいかした構想

その後、積算すると工事費は約二倍にはね上がり、百二十五万円余を要することになった。その増加分六十五万六千七百三十五円は論議の末、上下京区連合会が負担することになり、地価、戸数、営業に応じて市民に割りつけた。当時としては大負担であったろう。

琵琶湖疎水は遷都による代償として、京都市へのよい置土産となった。それにしても、北垣知事のようなすぐれたプロデューサーがいて、この金を最もよい形で用いたから蓄積として残ったので、一時的な利用で喝采を得ようとする人に使われたら、雲散霧消してしまったろう。金は、投資額の量だけでは測れない。すぐれた先見性に裏付けられたプロデューサー能力によって、まったく異なる効果を生み出す。しかも、その構想が京都市民の支持を得、ヤル気を引き出し、市民の巨額な負担を可能にした。そこに、青年技師田辺が、さらに質の高いものとして資金をいかし、京都の蓄積としたのである。

当時の最先端技術がいまも立派にストックとして残り、しかも京都らしい景観までもつくってしまったのは、技術も質の高い総合的な価値として実行されていたからである。

それに比べると、戦後の高度成長期のプロジェクトはあまりにも質を無視したフロー優先で、十分に質の高いストックを残しえなかったことは、琵琶湖疎水を見て大いに反省してよいところであろう。

［たむら あきら 法政大学教授］

写真は南禅寺の東南、蹴上付近を流れる琵琶湖疎水の清流。水は緑をくぐりぬけ市中へ向かう

肖像写真は京都府立総合資料館所蔵